

■論文題目	地方都市のバス停とバス待ち環境に関する研究		
■氏名(学籍番号)	菊池颯太(0412021033)		
■指導教員	倉原宗孝	■所属コース	地域社会・環境コース
■キーワード	バス停	地域交通	地方都市

1. 研究の動機と目的

バスは都市部から地方まで広く利用される公共交通機関の一つで、地域住民や観光客などにとって欠かせない移動手段である。令和4年度、定員11人以上の乗合バスの輸送人員は3,617,563,000人となっており（国土交通省 2024）、つまり令和4年度1年間において、3,617,563,000回バスの停留所（以下、バス停という）が利用されたことになると考えて問題ないだろう。バス停は鉄道における駅や、航空における空港などと同じく、地域と交通を繋ぐ接点であり、玄関口となる施設である。しかし、鉄道駅や空港などと比較すると、風雨を凌ぐことが出来る待合室や、座って待つことができるベンチなどの設備はバス停においては貧弱で、バス停によっては道端に標柱だけ置かれているという光景も珍しくはない。平野ら（2002）は、東京都内の都営バスの6つのバス停を対象とした観察調査、更にそのうちの4つのバス停で後日観察調査とアンケート調査を実施した。結果として、「バス利用者の約半数はバス停で何もせずにバスの到着を待っているが、半数は何らかの待ち行動（アクティビティ）を行っている。」、「待ち時間が長いほど待ち抵抗は大きい、立って待つよりも、ベンチに座って待つ方が同じ待ち時間であっても待ち抵抗は小さく、さらに、非高齢者よりも高齢者にとって待ち抵抗を緩和する効果は大きい。」等の結論を挙げている。また、作田ら（2019）は、横浜市営バスの14か所のバス停を対象としたバス待ち行動の観察調査と、その14か所のうち、設備が異なる4か所でバス待ち客への聞き取り調査、バス待ち行動の集計分析を行った。結果、「到着遅れが発生していないバス停においては、バス停設備にバス待ち抵抗は大きく左右されない。」、「到着遅れが発生している低運行頻度のバス停では、バスを待てるための空間が求められており、ベンチやシェルター型などの設備がバス待ち抵抗を緩和する。」等の結論を挙げている。乗合バス事業は、人口減少や少子化による利用者の減少や、新型コロナウイルス感染症の影響によって減少した輸送人員と営業収入が感染症拡大以前まで回復していないこと、バス運転者の不足など様々な問題を抱えており、今後厳しい状況が続くことは想像するに難くない。そこで本研究は、先行研究において調査がなされていない、運行本数が少ない地方都市のバス停のバス待ち環境について調査し、地方都市のバス停の新たな利用価値の発見と利用環境の向上に寄与することを目的とする。

2. 調査

岩手県奥州市内の岩手県交通株式会社（胆江営業所管内）の8路線のバス停152か所を訪れ、観察調査を行った。調査内容は、バス停における「屋根」、「ベンチ」、「灰皿」、「樹木」、「バスロケ」、「時計」、「路線図」、「自販機」、「公衆電話」、「ゴミ箱」、「コンビニ」の11の設備の有無と「バス待ち行動」の計12項目とした。調査項目は、「バス待ち行動とバス停環境が待ち抵抗に与える影響に関する研究」（平野ら,2002）を参考に策定した。

3. 結論

本研究では、先行研究にて調査が行われていない地方都市のバス停での観察調査によって、地方ならではのバス停の新たな価値を探った。研究を通じて、次のことが明らかになった。①多くのバス停で「樹木」が見られ、特に郊外のバス停では周囲に田園風景や森林等の自然が感じられ、市街地とは異なる環

境でバス待ちの時間を過ごすことができるほか、都会の喧騒から離れた落ち着いた空間で休息をとることができる。②先行研究の対象地（東京都・神奈川県横浜市）よりも比較的 1 日の運行本数が少なく、ゆっくりと時間を過ごすことができる。③多くのバス停は、周囲が自然豊かで鳥の鳴き声や木々が揺れる音を聞くことが出来る。反対に市街地の水沢駅通りの商店街ではオルゴール調の BGM が流れており、商店街の中で周囲の音を聴いて過ごすことができる。④周囲に商業施設等の注意を引くものが無いバス停は、逆にその場で他の要素に邪魔されることがなく物思いに耽ることができる。⑤田園地帯などのバス停は見晴らしが良く、遠くの山の木々の様子や道端の植物、鳥の鳴き声などの動物の様子を通じて季節の変化を感じることができる。⑥バス停が通院や買い物等でバスを利用する地域住民間での交流の場となり、過疎化が進む地域において、孤独死など、住民間での安否確認の役割を果たすことが考えられる。

効率性が重視される時間優位な現代社会において、以上のような地方のバス停ならではのゆっくりとした時間の流れ方も大切な一つの価値であるだろう。また、バスの利用環境の向上としてハード面の整備や運行ダイヤの調整など利便性を高める施策が行われるが、各企業で事情は様々で、すべての企業で行えるものではない。設備面や運行時間などの利便性に注目されがちな中で、本研究で取り上げた既存の環境から見つけられる新たなバス停の利用価値も一つの大きな価値であると考えられる。

4. 課題

本研究では筆者自身による観察調査を行ったが、まず全バス停 152 か所を訪れてバス停の実態を調査することを優先したため、全バス停 1 回のみの観察となった。時間帯や曜日を変えて調査を行うことで、バス待ち行動やバス待ち環境の差異が見られる可能性がある。また、今回は奥州市内の岩手県交通株式会社が運行する路線を調査対象としたが、市内各地域のコミュニティバスや他の自治体との比較によってもバス待ち環境の差異や、バス停の新たな利用価値が見つかる可能性がある。その他、今回は観察調査のみで、利用者に対してのインタビュー調査等を行っていないため、スマートフォンを操作しているバス待ち行動でも読書や動画視聴など細分化できる可能性がある。

5. 参考文献

- 平野孝之,大森宣暁,原田昇,太田勝敏(2002).「バス待ち行動とバス停環境が待ち抵抗に与える影響に関する研究」.『交通工学研究発表会論文報告集』22 巻, pp.257-260.
- 作田莉子,有吉亮,中村文彦,田中伸治,三浦詩乃(2019).「バス待ち行動分析に基づくバス停でのバス待ち抵抗緩和の要因に関する研究」.『交通工学論文集』5 巻,2 号,pp.285-292.
- 国土交通省総合政策局情報政策課交通経済統計調査室(2024).「自動車輸送統計調査 自動車輸送統計年報」.e-Stat. <https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003443765>, (参照 2025-1-13) .
- 公益社団法人日本バス協会(2025).「2023/2024 年度版 日本のバス事業 62・63」. 公益社団法人日本バス協会. <https://www.bus.or.jp/cms/wp-content/themes/bus/images/about/publication/R6HPUP.pdf> (参照 2025-1-13) .
- 岩手県交通株式会社(2024).「胆江営業所管内路線図」.岩手県交通株式会社. http://www.iwatekenkotsu.co.jp/rosen_map/tankou_20240401.pdf, (参照 2025-1-13)
- 国土地理院.「地理院地図」. 国土交通省国土地理院. <https://maps.gsi.go.jp/>, (参照 2025-1-13)